
PRINCESS

羽遠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

PRINCES

【Nコード】

N3020D

【作者名】

羽遠

【あらすじ】

花の国・フィオーレ国。その国にはまさしく花のような、可憐で慎ましい姫がいるとのことだ——そう世間で評価されるフィオーレ国の姫・ランフルと城使であるアルフレドが国の真実をつきとめる旅をする。

プロローグ（前書き）

注意

このプロローグには残酷な表現が含まれます。
が、本編ではそのような描写はほとんどありません。
そういう描写を少しでも見ると気分が悪くなるという方はこれをと
ばして、1話を読んでください。いきなり1話に入っても話は分か
るようになっています。

プロローグ

いつもと変わらない一日を迎えられると信じてた

しかし変わってしまったんだ

耳をつんざくような悲鳴

あたりに飛び散る赤いもの

部屋中にこもる異様なにおい

恐怖なんていう言葉では表しきれない恐怖

震えながら身を小さくしてひたすら隠れていた

そんな目の前にごとりと落ちてきた母親の頭

見つからないようちらりと視線を上にとやると

そこにいたのはどんな獣よりも獣らしい、人間だった

1 - 1 : 花の国の姫

フィオーレ国

花の国と呼ばれるその国には真、花のように可憐で慎ましい姫がいるそうだ。

「我が国は現在、他国との交流を閉ざしておりますが…姫、聞いておられますか」

とんと肩をたたかれ姫と呼ばれた少女ははっとした顔をする。

「聞いているわっ…いえ。」ごめんなさい」

少女は慌てて目の前の歴史書のページをめくる。
まるまる1ページほど見た記憶がなかった。

「本当にごめんなさい。もう一度説明してもらってもいいかしら」

少女がしゅんつとうなだれると、美しく、淡い金色の髪の毛が肩をさらりとすべる。

その髪をさわる指は白くて細い。
全体的に薄い印象を持つ少女だが、瞳の濃い緑が彼女を引き立てる。

その力強い瞳が彼女は姫であることを語る。
国王フーゲルと全く同じダークグリーン。

「いえ、今日は時間ですので。 姫もお疲れのご様子ですし、次回また説明いたしますよ」

ずっと男が出て行く様子を見送ってから少女は机に突っ伏した。

「やばい、眠いわ」

誰もいないのをいいことにか少女は髪が乱れていることを気にした様子もない。

淡い金色の髪がさらりと机から流れ落ちたのと同時に少女は眠りの世界へと入っていった。

「ん・・・」

目を覚ますと少し肌寒かった。
ぼーっとした意識のまま、考えをめぐらせる。

あら、私、なにしてたんだっけ

目の前に広がる歴史書を目にしてようやく意識がはっきりとした。

「やばい。あのまま寝てしまったんだわ」

慌てて寝室に飛び込むとクローゼットを勢いよくあけ、薄緑のドレスを引っ張り出す。

着ていたドレスを投げ捨て、出したドレスを頭からかぶる。手で髪をとかしながら、鏡の前にたつとすぐに髪を結う。

淡い金色の髪はたばねると少しだけ力強い金色へと変わる。頭の上にひとつに束ねた髪に最後に飾りの櫛を差した。

ノックの音が響いたのはちょうど櫛を差したのと同じだった。

「ランフル姫」

「はい、用意できてるわ」

扉を開けるとランフル付のメイドが立っていた。ランフルの姿をみるなり「お休みされてたんですか」と一言。

ランフルは苦笑で答えた。

本来はドレスを着せるのも髪を結うのもメイドの仕事である。しかし、ランフルは人に世話をされることを好まない。それゆえに我が儘を言っただけでさせてもらっているのだ。

だから用事がある時間以外にメイドが部屋に訪れてくることはない。それでもうまくやっているからそれなりに信用はあるのだろう。

一国のお姫様を演じるのはもう慣れた。

可憐で清楚。まさに花の国の姫。

そんな世間の評価を損なわぬように。

父であり王であるフーゲルに誇りに思われるように。

フーゲルは周りのことは全てしてくれるメイドがいて、何十もの美しいドレスがあり、甘いものが好きなだけ食べれることが女の幸せだと思っている。

母がそうであるから。

だから自分のことは自分でしたいなどとランフルは口にできない。

メイドがてきぱきとランフルの髪を結いなおす。

不本意ではあるが今日はしょうがない。

「ありがとう」

お礼を言うとメイドは嬉しそうに笑う。

メイドは仕える者の世話をできることが幸せなのだ。その笑顔を見ると、たまには世話を頼んでみようという気になる。

「では、姫様」

先に歩き始めたメイドについて歩く。

薄緑のドレスがランフルの動きに合わせてぎこちなく動く。

父と母と一緒にの食事は何度経験しても緊張するのだ。

ひゅつと剣をふる音があたりに響く。

あたりはすでに月明かりだけの時間になっており、自分の息遣いまでがはつきりと聞こえるほど静かだ。

しかしこれはこの時間に限ったことではない。

城の裏庭であるここは普段ほとんど使われることもなく、整備に来る庭師以外、日が昇っている間でも見たことはない。

アルフレドは長い息を吐いた。

城で働くことになって以来、ここを隠れ場に使っていた。

1人で考え事をするにはいい場所だったし、何より庭と隣接する林が故郷のそれと似ていたから。

しかし、その林に足を踏み入れることは出来ない。

城に獣や魔獣が侵入するのを防ぐため、厳重な結界が張ってあるのだ。

そこにあるのに、入れない。

帰れるのに、帰れない。

もう一度大きく長い息をはく。

いけない。夜は余計なことばかり考えてしまう。

こんな日に限って、いつも定刻に姿を見せる少女はやってこない。

もう一度大きく剣を振るう。雑念を払うように。

月だけがアルフレドを見つめていた。

その月明かりの色は、なぜかいつもアルフレドに会いにくる少女

の髪の色に似ていた。

「エルファ」

1人で剣を振るうことにも飽きてきたころ、その声はかかった。
アルフレドのことをエルファなどという愛称で呼ぶのはただひとり、

「レフィー、遅かったな」

辺りは暗く、一瞬見たくらいでは姿はわからなかったが、疑いもなくその名を呼んだ。

レフィーと呼ばれた少女は小走りでアルフレドの近くまでやってきた。

「ごめんなさい、少しごたついてたの」

レフィーは髪を頭の上でひとつに束ねている。服装はほとんどアルフレドと同じ物、いわゆる城使の服装だ。

城使というのは位の上の者から位の下の方まで合わせた城で働く者の総称である。

男女老若関係なく城使にはなるにはなれるが、少女はいささか城使になるには若すぎる。

そして、若干サイズがあっていないのではと思うその服装がますます違和感をもたしている。

「今夜もお願いします」

レフィーがアルフレドに向かって礼をした。
アルフレドはそれに対し頷くことで返事とする。

アルフレドは戦闘方法を教えて欲しいという少女に、毎晩、魔法の指導をしているのだ。

「陣はかけるな」

いいえとは言わせないアルフレドの言い方にレフィーは力強く頷いた。

使い慣れている者であれば、念じるだけで魔法を発動することができるが、初心者は陣を組み発動させるのが一般的である。

レフィーが陣を組みはじめるのをアルフレドは見守っていたが、いつもと少女の様子が少し違うことにすぐ気がついた。

「レフィー」

どうしたんだ、とその後続くことが分かる声音。レフィーは陣を組みのをピタリとやめる。

「気が散っている。集中力のない時に発動する魔法は一番危険だ。始めに覚えておけと言ったことだよな」

少女はふっと体に入っていた力を抜いた。無理に魔法に集中しようとしていたのだろう。

「ごめんなさい、エルファ。お願いがあるの」

レフィーから聞く「お願い」という言葉はこの夜の指導の依頼話以来であった。

なんとなく嫌な予感がする。

ひとつに束ねていた髪をレフィーはほどいた。ふるふるっとレフィーが頭を振ると髪はさらりと体のラインをなぞるようにすべる。一目で労働階級ではないと分かる美しい髪。

暗闇の中では漆黒に見える瞳がアルフレドを捉えたその時、少女はゆっくりと口をひらいた。

どうして周りは自分に隠し事をするのだろうかと思っていた。

姫、姫、と大切にされていることは分かるが、だからといって何も知らない無知な姫でいてあげるつもりなどない。

この国はいずれ自分のものになるのだから。私には全てを知る義務がある。

だから聞いたのだ。

どうして他国との交流をたっているのか、と。

周りが固まったのがよく分かった。

楽しい食事の場面が一瞬で凍った。

正面だが遠い位置にいる父親の顔が固まったのもわかった。

まだお前には早い話だ。そう言った父親。

お気に入りの薄緑のドレスがしわになるほど強く強く拳をにぎつたのを誰が気づいたであろうか。

ランフルが生まれたところには既に他国との交流をたっていたここ、フィオーレ国。

だから知らないのだ。他国がどんなところであるか。どこがよくて、どこが悪いのか。

外交の橋は王家が繋がなくて誰が繋ぐのだ。

そうですね、まずは自国の教養を深めます。とそんなことを言っていてその場を離れた気がするが覚えていない。

その後、急いで着替えて行ったのはいつもの裏庭。嘘をつかない大事な青年がいるところ。

「エルファ」

そう一言声をかけると、待ちくたびれた様子でレフィーと声がかかった。

そう呼んでくれる青年が大切だった。

姫でもなくランフルでもない、レフィーという呼び名。

そして、アルフレドでも職名でもないエルファという呼び名。

それは二人の間だけで使われる大切な名前。

その呼び名の間には身分もなにも関係ない。

1人の人間としての呼び名。

面倒な顔をせず真剣に毎晩付き合ってくれる青年。頼むとしたらこの青年以外いない。いるはずない。

ほんの少し気が散っていることを見逃さず気づいてくれる。
そんな人だから。

「お願いがあるの」

真面目な、漆黒の瞳。適当な気持ちであるならば一蹴されてしまふことは分かっている。

だから自分の精一杯の誠意で、瞳を見据えた。

姫だから

姫だからこそ

この国の一員としてすべきこと、知るべきこと。

「私を街へ連れ出して」

金色に輝く月明かりが自分を応援してくれているような気がした。

フィオーレ国

花の国と呼ばれるその国には、真、花のように逞しくみずみずし

い
姫
が
い
る
よ
う
だ
。

2 - 1 : はじめの約束

「私を街へ連れ出して」

そう言ったのは、この国の姫であるランフルだった。

毎晩、似合いもしない城使の格好をして戦闘方法を習いに来る彼女を尊敬はしている。

そして、こんなに真剣で直向ひたむきな姫がいるこの国に住まっていることを誇りにも思っていた。

が、彼女はいささか真面目すぎる。

彼女がこの国が他国との交流を絶っていることを気にしていることは知っていた。

が、しかし、誰も彼女にこれを教えないのは彼女のためであることもまた、分かっている。

まだ、彼女には残酷すぎる話であるから。

はぁ、と大きなため息をつく。

「どうかしたのか？」

隣に立つ、城使の男の声だった。

「いや、なんでもない」

まさか、姫が城を脱走したいなどと考えてることを他人に言えるはずがなかった。

「なんでもないにしては随分なため息だったぞ」

男はふつと笑う。その笑顔をみるとなぜだか少しほつとするのだ。彼の名前はカーター。

城で働く者、いわゆる城使であり、アルフレドと同一年の男だ。同一年ということ考虑されてか、警備など数人で組む仕事では彼と一緒にが多い。

真面目で堅苦しいおじさん方と仕事をするより随分楽で助かっている。

今日は、城門の警備にあたっていた。

城門の警備は2人1組で行われる。

城の入り口である門を守るには人数が少ない気もするが、城門の次には華門、水門、王門と3つの門が続き、中に入るほど警備の人数は多くなっている。王門をくぐらねば城には入れないため、城門の警備は2人で十分に事足りるのだ。

ふと地面に視線を落とすと随分と影が短くなっていた。もう真昼らしい。

早朝から警備にあたっていることを考えるとどうやらかなりの長時間、姫のことについて考えていたようだ。

「もしも、もしも、エルファが私の望みを叶えてくれる気があるなら、明日の晩ここに来てほしいの。できないというなら、絶対に来ないで。そして私が言ったことは忘れて頂戴。指導は今日で終わりにするわ」

姫が昨晚最後にアルフレドに投げた言葉である。

彼女はアルフレドが来ることを全く期待していない風であった。

そして、もし、アルフレドがそこに行かなかったとしても城を出る覚悟はあるようだった。

まだ、教えることは山ほどある。

教えてやりたいことが山ほどある。

一国の姫が単なる城使に過ぎないアルフレドを頼ってくれるのはとても光栄なことである。

彼女がアルフレドのことをどう思っているかはわからないが、アルフレドには、彼女に返さねばならない恩が山ほどある。

彼女の申し出を受けてしまえば、いくら彼女が望んだこととはいえ、アルフレドは重罪人だ。それを分かっているから、彼女はアルフレドがくることを期待していない。

妙に悔しかった。

「眉間に皺」

ふっと笑ってカーターが指摘してくる。

つられてアルフレドもふっと笑う。

もしも彼女の願いを聞き入れるなら、こんな日常も帰ってこない。

帰ってこないのだ。

無理強いできることではないと理解している。

だからこそ彼に期待はしない。それでももし来てくれたなら、

ランフルは首を横に振った。

「そんな、エルファの人生を台無しにすることを私がしては、いけないわ」

口にするときゅつと胸が痛む。

そう、自分が言ったことはエルファを重罪人にしてしまうことなのだ。

それだけは嫌。それでもエルファに来て欲しい。

矛盾した気持ちがランフルを苦しめていた。

ふるふるつと頭をふって気持ちを入れ替える。

「それでも私はこの国の姫として、やれることをするのよ」

綺麗なドレスに髪飾り。

もつしばらくつけないかと思うと、妙にそれが素敵なものに思えた。

緑のドレスに身を包み、青色の宝石で作られた花冠をかぶってみる。

髪を手櫛で軽く整え、鏡の前に立ってみた。

「ふっ・・・」

思わず笑いがこみ上げる。

ランフルの髪は、ペンキでもかぶってしまったかのように、まだらになっているのだ。

今朝、ランフルが自分で染めてみたものなのだが、あまりにも下手すぎる。

かわいらしい淡い金髪でなく、さわやかでおとなしくみえる青にしたかったのだが。

「こんなことも、私1人じゃできないのね」

自嘲気味に言うと、そのまま自分の姿を隠すように鏡に手をあてる。

「それでも、1人で行く覚悟・・・ある？」

自分への問いかけだった。

答えはイエス。

ランフルはぱつと顔をあげると花冠をはずし、緑のドレスを脱ぎ捨てた。

代わりに着るのは街の人々が着ている簡単な服。

そしてその上から城使の制服を着て、長い髪は高くくくり上げ帽子の中に隠した。

帽子から出るのは青色の髪の毛。ドレスではなく、城使の格好をしたただの娘。

それでも、どんな格好をしようとも、瞳の色だけはいつも同じ。

父と同じ、ダークグリーン。

髪の色を偽れても、名前を偽れても、それだけは偽れない。

鏡の中の自分と目を合わせる。

そのダークグリーンの瞳に向かって言うべきことはただ1つ。

「行ってきます」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3020d/>

PRINCESS

2010年11月13日02時25分発行